

なるほど！うみはく  
夏休み・海の自然体験学習  
「柴づけ漁」と「カニカゴ漁」

市立海の博物館 電話 32 6006

vol.8



柴づけ漁で捕れたイシガニ

海の博物館では、地元鳥羽磯部漁業協同組合浦村支所の協力を得て、夏休み期間中に手漕ぎ木造伝馬船を使って、子どもたちと「柴づけ漁」と「カニカゴ漁」に出漁する体験学習を実施します。

「柴づけ漁」とは、浅い海に柴（葉のついた木の枝）を沈めておき、そこに集まってきて葉に隠れている魚やエビなどを大きな網ですくい取る漁法です。また「カニカゴ漁」は、籠の中に餌（魚の切り身など）を入れて沈めておき、その餌に誘われて籠の中に入り、出口が見つからず、逃げられなくなったワタリガニやイシガニなどを、籠を引き上げてつかまえる漁法です。

過去に行った「柴づけ漁」では、メバルやタケノコメバル、マハタ、ギンポなどの魚やテナガエビ、イソスジエビ、モエビなどのエビ類、イシガ



柴づけ漁で捕れたスジエビの仲間

今年の夏は、海の博物館の近くの大吉浦においてアマモがたくさん生えているところ（アマモ場）に「柴」と「カニカゴ」を沈めておき、木造の伝馬船2隻に子どもたちと乗り、櫓を漕いで進む昔ながらの漁体験を実施します。みんなで力を合わせて「柴」を引き上げて中に潜む魚やエビを網ですくったり、また「カニカゴ」を上げて中に入ったカニなどをつかまえたりする体験をしてみてください。

二などが捕れました。今年は「カニカゴ漁」も実施しますので、ほかの魚介類も捕れるかもしれません。



柴づけ漁で捕れたメバルなどの魚



柴づけ漁体験の様子

とき 7月26日(金)、8月9日(金)、8月23日(金) 正午～午後2時30分(荒天時は中止)

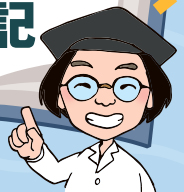
定員 各日4人(小学校4年生以上)

体験料金 1000円(資料代・入館料込み)

持ち物 長靴(ぬれても良い靴)、水筒、帽子、タオル

※要予約・先着順

鳥羽・海藻文化革命  
岩尾博士の  
海藻博物記



vol.8

～アマモの話～

水産研究所 電話 25 3316



2012年に見られた坂手島のアマモ場。今はもうない



現在、坂手島ではわずかなアマモしかみられない



花を作る株が確認できる(写真右の株)。種をつくり、子孫を残そうと生きている

今回は海藻のアマモを紹介したい。太古の昔、海から陸に生活の場を移した植物の一部は種子植物となったが、再び海に戻っていった仲間がいる。その仲間の一つがアマモである。陸上種子植物が持つ気孔という器官を失い、細胞壁も海藻に似た構造になるなど、海での暮らしに適應している。アマモは北半球全体に広く分布しており、動物の餌、生息場所としてだけでなく、海岸そのものを守り炭素循環の形を多様にするなど沿岸の生態系の中でも重要な役割を担っている。

しかし、その沿岸部、特にアマモが好む干潟は気候の変化や汚染などの脅威に最もさらされやすい場所でもある。1950年代には伊勢湾周辺で1万5000haほどあったアマモ場は現在500haほどに激減し、回復の兆しも見られない。鳥羽海域では、答志島南岸、安楽島や浦村などに比較的きれいな浜が残されているので、元気な姿を見ることができよう。

水産研究所のある坂手島では、数年前まで中之郷に面した南西側の砂浜に広くアマモ場がみられたが、いまでは一本も生えておらず、坂手港の奥にいくらか残っているだけである。

種をまいたり、苗を植えたり微力ながら再生試験をしていくと同時に、坂手をはじめ、鳥羽海域、伊勢湾沿岸のアマモの動向に注目していきたい。